諸國里人談

一

ル 3
3035
1

12.3
3035
1-5

蘭の滴

延申郎沾涼著

池田二酉堂藏版

林檎花

昨日旅今日驛明日者末太越
邊畿山之岑奈連哉空行月乃
須恵能白雲矢嶮而于着爲撥
巡於国〻新剝桑門頁笈飛錫
行程駕丁少六馬士与作于話
知新往山柴刈尉來川洗濯于
媿温故呉竹之爲不思義叟而

也飛鳥川ノ爲レ變行狀而也毋〻
禿石筆ノ先有甚ノ蒼坊主ノ草稿矣
書賈二酉堂設レ之而與題之云
不レ直採有ノ侭無里人ノ談爾云

東都俳林菊糸山翁沾涼述

故横山有策氏
昭和三年五月
寄贈
信濃

諸國里人談卷之一

一 神祇の部

○和布刈　豐前
○芝祭　出羽
○麻伏神軍　佐渡
○龍王祭　淡路
○人魚　若狭
○梅園社　肥前
○熟田的射　尾張
○筑摩祭　近江
○諏方祭　信濃
○吉備津釜　備中
○飽海神軍　出羽
○直會祭　尾張
○龍蛇　出雲
○大頭社　三河
○常陸帯　常陸

外四冊

門 ル3
號 3035
卷 1

二 釋教の部

○佛舍利　大和
○大觀音　泊瀬 江戸 豫州
○善光寺　信濃
○鬼押　伊勢
○高野禁笛　紀伊
○三猿堂　近江
○大佛　奈良 京都
○嵯峨釈迦　山城
○石羅漢　豊後 大和
○金印　相模
○雷島　加賀

諸國里人談卷之一

一 神祇の部

菊岡米山翁著

○和布刈

豊前國門司関早鞆明神の宮は海なりすてゝ石の階あり常に二十階ばかりは水中に入てその大いさ毎年十二月晦日のゆふ潮の胸よりあらはるゝ石階をくだりて海中に入その時潮たゞちに引て海底の和布を一束刈りて神に奉る故に諸人二束かゝとて潮よ深くくの雅あり此時い社氏家の男女海上掛り松の火をともくくゆきを消しその剖浪の義ますけとり浪大きゝて海あらく海底より入る人ずる

とおもふこころざしく浪花づのうて又ものゝ道ひろめ
ゆかゝしし天朝仲の和布を神市より伊勢又帝都へも年
なりまをを和布の神事とゝ○當社い敬神の屬にて
神功皇后三韓退治の時干珠滿珠を拾ひ給ひ祈を
儀しかのしその頃皇后筑紫を行ふかれて軍の中に路
延あるもいうんとつゞくを行ふよし神和布を敬ひ
もてめ行ふよ三と勝を征伐行ひ帰朝の時
筑紫の第鎮ゝて沖降延あるを應神天皇ゝし
し和布と食する者皆病を治を疫癘いを示給可貴
祭
○諏訪の神
伝濃國諏訪郡の神い東征守護の神ゝて極民帝の

時四村の軍ゝ逆らし毎年三月七日祭の祭七十五供を
氏人の祭ゝ何ゝ分ゝ拾ゝ事ゝ月忌と集ゝ
例あゝ十一の增減ゝ七十五の内あ耳の切れゝ
ゝ一つきゝあゝ奇なゝ
上諏方 祭神 健御名方命 下諏方 祭神 八坂入姫命
上社ゝ七不思議
宮殿 書賢堂の板襖に穴あゝ紙をあてゝ口ゝ
下社の三重の塔ゝ紙をあてゝ口ゝ
社壇雨 毎日己の刻ゝ雨あゝ
根入杉 根八方へ出ゝ
温泉 湯ゝ口ゝ赤の口を開ゝ湯

氷結　冬氷結湖氷る時さきにして狐こゝろを絃て
千後人馬氷の上を通ぶ也又狐渡る也通ひを止
麻の苧　桑の皮七十五日煮年たらず
富士移湖　湖上より富士の影うつる　甲斐一国を尋ね其ほとり多くあり
すゝの海　衣を脱ぎ身を潔ふ
○芝祭
出羽国大泥村より毎年四月八日芝祭とて有り其所
大きなる池あり一山の伏池の色に臨み行る時
の芝四五尺ほど裂て池に流せば芝舟と
なり其時寒くして指ひ強へとなるとて女時猟場を祝
なく年の豆たらひ湯にて池より魚分事有るとし

しきの祭なり　西方の苦師佛を安置し一山四十八ヶ寺
ゐる山伏指の示し此日迎ゐるの人多集る
○吉備津釜
備中国吉備津宮に釜殿とて有り元に大なる釜あり
祈願の人吉凶を卜る社人玉箒を以て一口の鐘を
釜中にうつし法を修し釜鳴動にその吉凶
決す所にきゝ百日を勤ずるとて其吉凶
成就不如就病人は全不吉を考ずるなし
吉社備中賀陽郡の内板倉川の辺備前の界し
○麻伏神軍
佐渡国麻伏明神毎年二月九日大雨風にて夜ゝ人

大きなるものとなるべしと云ふ毎年三十日拾あつて時天下の業例年
あつて土俗これを祝い神軍あるとひつくへて子人出をせざる
籠出りあり此日社頭の色に如ざの矢の根数あつ出矢
かり海さかへ矢をとこの形ふりて大さ芋の茎の根の
おもて人民ふとを拾ひて持ちて国中の俗もて拾ひて集らすあり

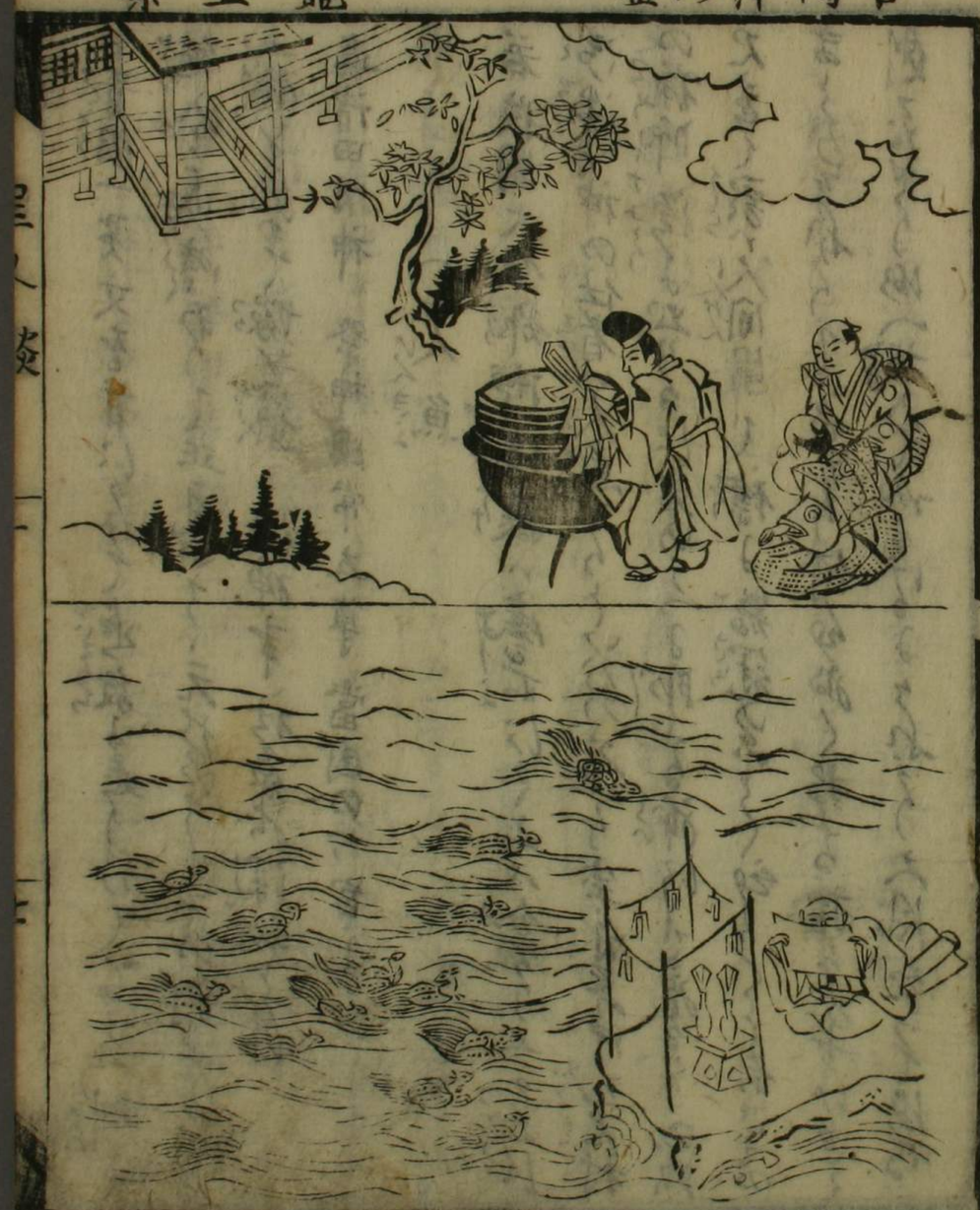
○能海神軍

出羽国庄内能海社ハ大物忌太神を号奈神食稲魂神へ
年に一度風烈しく震動して天氣常に異なる雪霰の
中より矢の根交て降ることを神軍とて土人恐ること怖
時に後本法よりあつて藏にあつて鏑矢墓股ホの類
数あり古ことを雷斧と云ふ雷斧伏の矢の根よりかつ

異列能列の中にあり常列雷斧ありと云ふ則
本草にいふ所の雷楔雷斧の類ひなりへし

○龍玉祭

陸奥国由良の湊八面西の海中に周り三里ばかりの小島あり
ばかり平生ばかり大石海へさし出る方に間あり二の平なる
石あり毎年六月三日由良の八幡の社僧ありけるのとに供物
を海へ祭儀を能に出るを龍王祭とかしけ所に出て
の石の色に大小の龜数万群集りて海上を塞く祭事
とこめることあつて忽に去る今にいたるまで例年あるなり
案ずるに年号しばらく秦武文の使ひ卯島能源河
小河あり今年天に祭る



○直會祭

尾張國中島郡國府宮　清洲ノ近所　毎年二月十一日ニ
蚕金祭とりおこなう　神官旗を立て道の邊に出て往来の
人を一人捕へさるのことにて其日に法人戸毛を洗ひ清む藤金
い旅館にて此事を告げて逗留するし斯ることも
自然とおのづから捕へる共必ず其人を沐浴をさせ浄衣
を著て神前よりつれて大きなる俎板一箇あるく俎を庖丁
生膾着をおき蚕又人形を仰て捕へる人の代とし
未那板の人を獻てその傍に捕へる人を居しめ神前
に備へ進ずる事一夜し翌朝神官来りて伴の備物人
に神前にうつし土をもって大きなる張屏を仰て彼人背に負

世青州一貫文を首にかけて逃敗を走り行てかの屋倒れ
絶入せし時ありて正氣付て元はしその倒せしかの
土俵と納めて嫁と築しけ神幸社系深秘なり

真清田明神　祭神國常立尊　當國の一宮し

○人魚

若狭國大飯郡沖浅嶽い磨而にて山八分より上に出
海潮神の仕者い人魚なりといひつたえ宝永年中乙丸村
の猟師海より出るに岩のうへより昇る海にて居るこの猟
人喜て歌い人間にして襟より鬚冠のごとく動くこと赤色なる
まとひてあり下い魚なり何如なく指る櫂をもて打けるに
則天せり海へ投入て海の荒けるよりそれより大風起て海嘯

す一七日止ぬ三十日たちて大地震一陸海嶽の樹ども海
すて地裂てこの村一つ堕入こと元明神の崇とい へり

○龍蛇

出雲國秋鹿郡佐陀社い海に神すあり十月十日
ごとのごとく沖より一尺ばかりの小蛇一丈浪よりのりて磯に寄
その蛇金の彩色ふとく甚だしく一寸ばかり龍蛇といふ
神官潔斎して汀に出くこの事を海潮に
ゆるに竜蛇その屋のうへより曲り形を則神前より進ぶし
足海神佐陀社へ放るものし

祭神伊弉諾伊弉冊の二神し十月い陰神崩御の月
なりて法神この社より集り給ふ故に出雲にて八神在月と云

○梅薗社

肥前國長崎九山の家に居る者あり平日天満天神を信じ大宰府の祭礼の拍子に事寄せ服斜して殆ども沖を一日途中ゆゑ不平口論のかすび殺されけるの相手の人を害し遁るべきあるを恐れ自殺してぐうかくて彩色らるもの長崎くいして森生し家の脇にて焼捨ぬ沖より流れ出る神像を沖より流れ出る所に又の添あり血流れ大よ驚惶し是神の我難代つて給ぬ梅薗社の事なり

天神と稱し長崎より二三丁の中の事し

○大頭社　大尾社ハ下和田村

三河國碧海郡上和田村　岡崎に大頭社とよあり深文よりを

青銅百文を長て紫くロよ吟人毛井のもとより社まで四丁遠くしてけるを稱し福を祈る人あり代参をするよる神あり叫ぶ人い行保せ叫ぶるハ何るとも此故を祈へしいて行るのあるまゝ○天正年中に主守津左衛門五郎忠茂一時病して山に入一樹の下にて夢に睡を催りるし夢の白犬袖を咬て引て目を覚し又睡に大頭に松の上に吠る睡眠の妨を怒て海刀を抜て犬を伐その跡倒て樹の上の蛇の頭より嗤分て犬義を大きを驚き即蛇を殺し彼犬の忠情を感し故郷村に大尾大尾を建て是を祭る

▲東君南百甚歳ニサセモフ

○熱田的射

尾張國熱田社より毎年正月十五日的矢あり六十人の社家

事を射るしるし射ざるせし其系を没し官職をそなへたるよりて南社の社人年中おてうしを勤く立ち三すの的と事に射發しるしるし猶く諸達人しるし其の的に三人てうの大的めくるうるとはるあるすし事しるし

沙弥おーく神恵に背く米方射發を米ぬしてあるそ

○常陸常

俊相教ご云常陸国新治郡の神の家の日女の命さ一人のおはさあるかことと布の事に事つかくしまし神事をなくしまし人さ男のひん等るものつしかるし女さそかとふ男かしもそかとく云

衣まひしちの神のちひそ人のつまをもひしあるもう胡

今は事い絶しるしるく一里

○筑摩祭

近江国湖のひーー坂田郡の海を助書しるよ為取書

十余所そして筑摩の庄あり村の明神の祭いを月年の日なりその村の女おしるを舎るその男の敷祢て去獨を作して板しるそうかくいてきしまつりかをして神興の殿るはいて

ろろしそーー男るそるる敷をかくをかたちまち神祇

を吹ろるやうするから服清慨惜せーあ為るは神の方役なりそしむーー蝦婦おりしおはるの男をせーるを

ちちく大きなる鶏ひしるをるきおるこの敷祢て小鶏を

はしてた鶏よ今はしせ人目をかくせーーそ神多よ

そひきて出ひーーしおるの小鶏くをしそ取みう

けうこし中うゐ左の稲をいてきてこしらえ物
さそく神まつりもなれるのちのしとの人へ西の人へいちく海とらの
しちとうい立まを通しに九月物よハはく海とあり
いせ物のうにひしりのことを女の海く世を魚ぞと名ぞる
うの人のたをやをよのびてをのこをこそ後ほうへ
あのをやるはくまのまつりとくせんつまをとの人の稲のかまえん
法庸集に　家社　忌
乗くもに滅をのこそをうるはくまの稲よりくぬ物へ
又日筑摩庄に大膳職御厨の地なり故に御食津神を祭
り神に稲食をつくるとうるかつよりて比賀の女嬢入の
時の祭祀に稲釜を載く神に進ぐし

㊁ 釋教の部

○佛舎利

大和國平群郡法隆寺の佛舎利は十五月まて一つ光放します
十六月より一つ光減ぜ毎日午時にせの猛しく庭にまける
生ぜ或郡に舎利をうめる
為に仏の舎利をいてせるたちまむしまさる今を双鋼
天竺より采粒を舎利に成仏舎利又采粒より作る故に舎利と云
○慈恩上生經疏云舎利者稲穀也馱都者體也佛身
大小如稲穀量故以為名
聖德太子御父用明帝御祈願のために自藥師の像を彫
寺を造りて御ことを病不金崩御しをしたまと

寺を造り推古天皇十五年に寺造成就し
寺別號い七嶽寺　聖徳寺　宝龍寺　来立寺
住生寺　島路寺　法隆学問寺　法相宗八宗兼学

○大佛

南都東大寺い聖武帝の造営し天平十五年近江国
盛楽宮おゐて大佛を造り同十六年に佛像成就
大寺を建く成就を天平十七年南都よりを遷す
番匠　福都百世　益田徳手　佛工　国公唐　治工　狩本男玉　高市真国　高市真唐
開元道師　婆羅門僧正　呪願師　行基僧正
天平勝宝四年四月九日供類　天子行幸
道師　婆羅門僧正　呪願師　道璿律師

大佛座像高五丈三尺寺
面長一丈六尺　廣九尺寺　眉　五尺四寸五分
目長三尺九寸　口　三尺七寸
鼻長三尺　穴径一尺　頸　二尺六寸五分
耳長八尺五寸
顋長一尺六寸　螺髮　九百六十六　高一尺
胸長二丈九尺　肩径　二丈八尺七寸
腹長一丈三尺
肘ヨリ脇ヲ一丈五尺　臂　一丈九尺
掌長　一丈三尺　中指　五尺　周り四尺寸
脛長　二丈三尺八寸　膝蓋　七尺
膝前径　三丈九尺　足裏　一丈三尺

土蓮花 周三十四丈七尺 高八尺　蓮花銅座 径六丈八尺 高一丈

花 二百八十枚 周二十一丈四尺　基 周り二十三丈九尺

○治承四年十二月廿八日平重衡の兵火ありて伽藍炎上

後白河法皇源頼朝公を勅して東奥

皇源信を勅化―大仏殿本尊悉滅し

建久六年三月十二日供粮

道師 権僧正覚憲　咒願師 権僧正勝賢

後鳥羽院行幸　源頼朝上洛

番匠 物部為里 橘為安 宗

冶工 朱ノ陣和桂 草部是助　仏工 康慶 運慶 定覚 快慶

仏を鍍金洞の入用

黄金 一万四百三十六兩　唐銅 七十三万九千五百六十斤

水銀 五万八千六百二十兩　白鑞 一万二千六百二十斤

金箔 十五万枚　炭 一万六千六百五十六石

○永祿十年松永弾正兵火ありて回祿して御所焼

給ふ南都の画工山田道安とりて去財宝を拾ひ補

延宝の頃當寺の僧龍松院殿造立の大願をおこして

勅許台命を奉り諸国を勧進して堂を

新婚千僧供粮貞享五年四月二日棟上宝永二年四月

十日堂供粮宝永六年四月八日

別號 城大寺　大華厳寺　恒説華厳寺

国分寺　金光明四天王護国之寺　三論 華厳 八宗兼学

○京都大佛殿方廣寺、天正十四年大閤秀吉公建立あり給る釈迦の大像八葉蓮の後法方廣佛の脇相をうつせりと故に方廣寺と号大徒寺の古溪和尚をして住せしむ任せしむ

たれとも成就せすして遷化をかるゆへ聖護院道澄別當職となる慶長元年閏七月大地震に佛像破壞秀吉公佛の知見をもつて何ぞ其分の破壞を志さるや信ぜらるたりとのひて矢を射られ後信列善光寺の如来を請じて殿の本尊とし時方に殘暑酷烈なりしに依て雪天に為て多く乳人を伴ひ来れ崇なりしに秀吉公八月十八日に薨逝しその第十七日佛を善光寺に還さしむ

その後内大臣秀頼公新像を作

しに火入て孫に慶長七年孫造の日佛の後の中より火出て堂舍焼失せしかとも堂を建立して佛を則火大像を移す

後に堂を擬しひとしく雍州府志

佛軀長十丈　但座擅とも

面長　一丈八尺　眼　挟五尺五寸　竪二尺

鼻　高五尺五寸　挟四尺　鼻穴　二尺

口　挟八尺　竪三尺三寸　耳　長一丈

掌　一丈二尺　指ノ端ニ至　拇　周六尺五寸

膝　周　十三丈八尺　心　一丈四尺　挟七尺

羅漢　数三百五十大小二尺五寸　白毫　径二尺

後光　高十八間　挟九間　蓮花壇　各八尺

堂棟　高サ二十五間　桁行　四十五間二尺五寸
梁間　二十七間五尺五寸　柱　九十二本　径五尺寸　四間隔立

○大觀音

和列泊瀬山長谷寺の本尊は十一面觀音立像二丈六尺なり
方八尺の巖石を座となし列高鳴郡三尾山の霊木を以て
法道仙人と比丘道明力を勢てこれを建て天平五年五月
十八日開眼同十九年堂成就に其後焼失焼あり
佛燈かゝる或る時は焼る事あり
云て焼じとゝし佛工は誓文會秘誓主勲なり
開帳は黄金一枚開帳又黄金一枚し一七日の間設開
尋常の開帳は帳をもつて巻し此は上より巻かゝる事を洋

○相列海鹽海光山長谷寺（浄土宗光明寺末）本尊十一面觀音立像
二丈六尺二分和列長谷寺の本尊の末木を以て佛師春日造之し
毎年六月十七日會日参詣群集し　坂東巡拝四番
常は堂の扉を閉て暗し青紙を延て開帳し午時
燈篭に灯を點じ車と市頭の人々上ゲて洋之
○武列江戸青山年橋菩陀山長谷寺（曹洞宗大中寺末）本尊十一面
觀音立像二丈六尺沖頭和列長谷の本尊を以作し河内
竜雲院と溜池の人々あり天正十二年に遷し開山門菴和尚
常に帳を引て市を洋
佛工誓文會誓主勲は兄弟なし河内風春日村の人し故に
世と春日の作と称に三尊を以作し

○嶢峨釋迦

山城嵯峨清涼寺の新造の一條院の御宇東大寺の奮然法橋宋國より入て聖禪院の為に優填王二の摸像を作乃佛工源栄を雇て摸刻一尺の像を得鄭仁徳の紀よ第く所る又一切經五千四十八卷十六羅漢の畫像を獲く蓮臺寺に移る大臣公卿車を行りて之を迎ふ其優填の摸像を尺よ今嵯峨の清涼院よあり　元亨釈書

大念佛　毎年三月九日より十五日に至る　弘安二年に始

所身拭　毎年三月十九日

当寺舊融大臣の山庄棲霞觀なり貞觀年中に改く寺とし空海に賜ふ任持恒寂を開祖とす

○善光寺如来

信州水内郡芋井郷善光寺の本尊ハ欽明天皇十三年百濟国より渡り給ふ人とも信せん推古天皇十年草創ーく伊豆少郡日光宇治村より寺を建て後皇極天皇元年に佛勅ありて水内郡に建立ありて本尊を本多善光よりして寺號とし元世に霊社灵佛多ーとなりて他国より信を発し

て参詣する伊勢太神宮本尊ハ毎朝日の時に太神宮を拝ぐ時に大念佛に参詣の者以前百にあるを雑掌毎日毎に百人二百人の参詣御堂より溢り其他の人ハ掃にて皆旅人なり

如くなる尋常の中にたちまち享保年中に江戸深川の人自を掘く育うけ出家して四八歳歩くを運ぶ所の桑に求ること眼あきて開せり その我家の枝佛の彫音と化して絵馬にして堂に掛ること毎月参詣ありて

法国佛の灵拓多ーと

○石羅漢

豊後国耆闍崛山羅漢寺ハ曹洞宗にて宇佐の八幡より西ゆ山里にあり釈迦文殊普賢五百羅漢千躰の快蔵なり三千七百体の法佛皆石佛なり開山国翁禅師元禄時逆流健順

とよ仏人あく力を合せ一夜の中成就せしと云

○又大和国壺坂のひとし八町うたちに高香山あり石に彫りたる仏の五百羅漢（千体仏ト云）部の曼荼羅ありて奇

異の巧にて凡作よりあり○又の谷の谷より石階の五百羅漢村九十村

はつりのらうにてなり

○鬼押

勢州津の観音堂に毎年二月朔日鬼法あり鬼押

とらふるあり此本ない海中より出現の係むし竜神

あるを出しそ奪ひ去るを追ひひるるなり

云り赤青の鬼の面を被るもの二人其形の装束を

たちよりひきそ寄竟の力者二人宛あ従ひ名ゐ

拵へ又一人褌姿を被るもの一人合せ三人そ

故鬼面後に連り堂のまを廻り三遍なり浦方浦方の

者ことに数百人掘の棒そ持てこれ家ゐるこれに

を手車とし左右の引尻引尻分なる事をいまし鬼牛

を敲撞し左右の引尻手木を持ちひ中こに寄せ

ざるなりいるもして此鬼を流く流しそ年ゐるに流

加へ寄ん得ん事をとる俗の鬼い雇ひ人あくをしい寄教ゐ

寄ん事をとる俗の鬼い雇ひ人あくをしい寄教ゐ

寄ることを遠れ祀ゐる拵くしけり同日町中にて浴衣一枚

に髪を乱し神輿そ拵十人あるひ二十人

ほとに一ひもくにより

龍神と退退る遠し俗し観音参ゐ云

○金印

相州小田原最乗寺の金印は開山了菴和尚二為明神の若よりたゝ堂内より掘出すの神璽し其時金剛水と号す姫井ナリ

朱をもて黙々く佛菩薩の眷屬に又印歩もあり印肩不定

しゆ寺後を西弱とられて天狗病魔魅図両を遮夜叉の眼は印一つハ一人の具印三つあるハ山祇悪獸の眼よハ四人を付きたるとゝ云り○一年深川佐賀町名の織布を商ものの上列へ買ひ求めし深谷本庄のるゝ六人の盜賊あるへ元和比四人と二人ハ盜ハ元の盜ハ松杉をおもとして花瀧切合ハ盜なりしゝ出てるもとゝ退去て彰らして助るもるよ業もれて五ツ押るる金印を懐にたゝり今くひ後なりゝ蓋伝説ありる

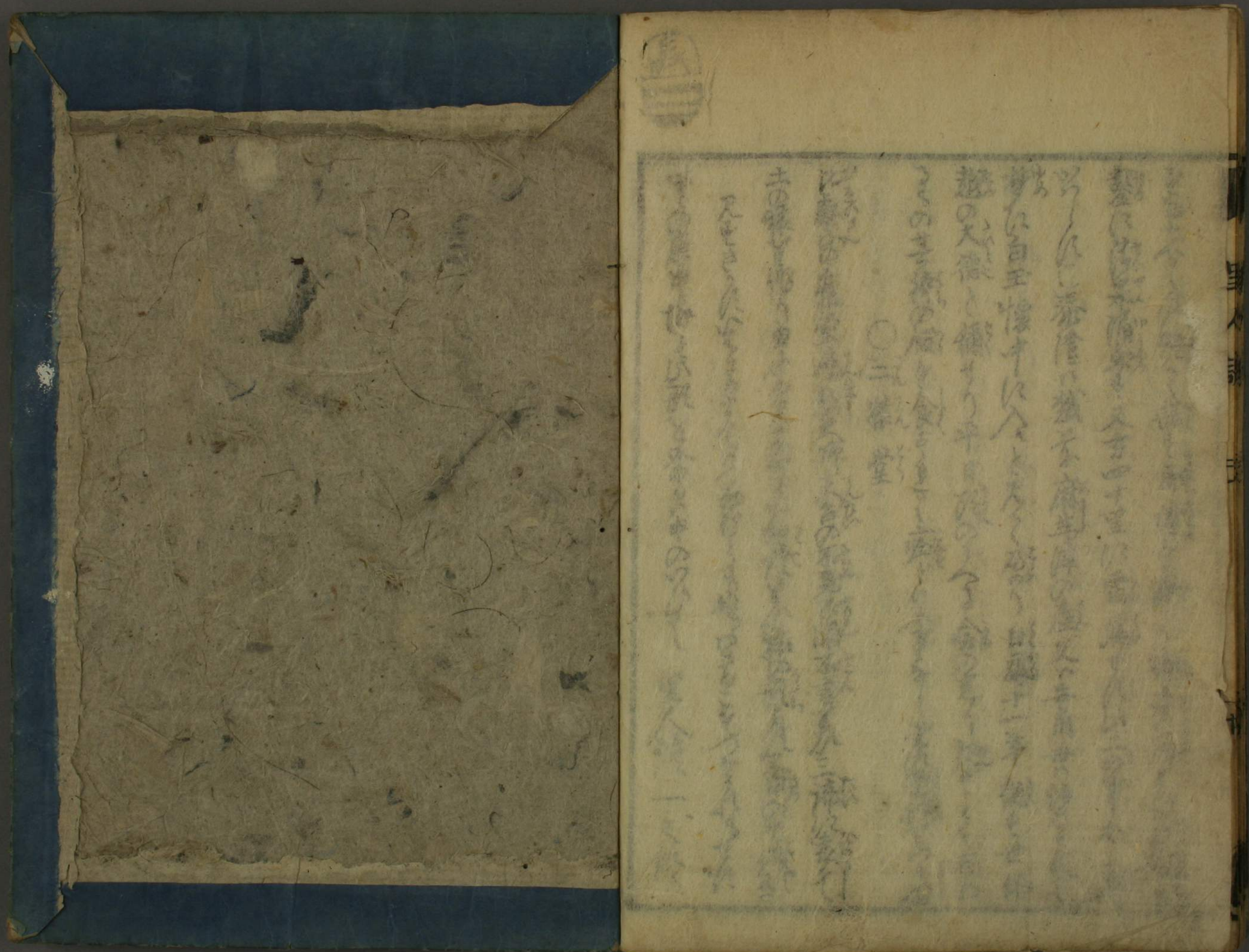
○高野山禁笛

大閤秀吉公高野山に参詣あり遠国のわり獣達を供せるもしゝうまくの獣を無ハあるる時偽倡ゆるハ法なる事ハれとを当山ハ用ひ大師の制ぱ笛のもるを禁じし秀吉公ハ笛の事をきくものるを面く個の中に落ちたるを岩屋をるるいんさんに隠あり蛇柳の高ハるる空劫ハ笛ハ大蛇もあり大師うまるを向ひ我ひ法の妻他とるさん海法ありていた人の恐れあり急を加へ〳〵大蛇日ひ〳〵行不里霜丘量しなんぞひ而をおんや干時大師絶法をれ蛇の鱗の百に毒虫を

生じさせて難をなさしむ大龍あまたを加持して降しけし
地を去らんとせられしが毒虫忽ちに滅せりそれより此堂か
ほとり後の山中に龍窟ハ竜の吟ずる声きこえて此里の里に
安をなさしめて大龍ここに出るとなりその声を禁じける
なり大国がおちて如何なくともみるしかりと縦をはじめ
三春ことぞ何あるハ山法にまうらせ三番ハ法にも出ずる絶を
大師に統へしぞ咒せられしに満天俄に黒くなりて是等に
湧む大風古木を折大雨軒をなびし雷八方に満て山谷
鳴動せりさしもの大国居そて怖しき二十町ばかり逃てと
様子をうかがふて立退き跡かたに入て跡を待けれけり
二時ばかりありて少しくうち晴たりしそれより大国大師の

法をいよく信じ給ひけるとし

○雷鳥

越の声の雷の名を云あり雷鳥とて形ち雉子に似たり
去る山の松の木陰にかくれて雷の鳴ときまする雷のあるなれ
ば其所を去て最上高く飛ぶ是其辺に雷の雉ありと云り
○越前国古志郡国上山の麓に塔を建るに二度雷のため
破られしより白山の開山泰澄和尚塔の傍に座して法華経
誦されしも大きに雷し雲中より一童男があらはれ和尚の前に
くだりて饗しも落て和尚に救を乞て曰我ハ山の地神
なり塔ある時ハ住所無し故に塔を壊しが今時泰澄
曰此山に水なし海の泉を出すべし又方四十里雷の声

をゝとゝ跪く諾を聽く神童指をゝ五歳を
鑿に法泉涌出せ又方四十里に雷霆せんに二の事今よ至
かゝるに泰澄は越前麻生津の産父は安角母は伊賀氏し
夢に白玉懐中に入と思へり白鳳十一年誕生世俗
越の大徳と稱せり平日ひのうへ金の光り数しく病わ
るまの其神の仮を食ふ多し立陸とり今年一尝見れ
○三猿堂
比叡の三猿堂は慈覚大師天台の不見不聞不言を三帰に表て
土の猿を作り中に石の猿の形を入る又申の年の猿
人をきんをさすてうつはけるもかなはなるこそつをれもせん
丙の庚申は陽より起る故申のひとし　聖人伝一之終